

天は二物を与えず

野 田 光 雄 (九州大学名誉教授)

Two Matters in Nature are not Present

Mitsuo NODA

仙台の青葉城で土井晩翠が作詞し、豊後竹田の古城で作曲された“春高樓の花の宴”〈荒城の月〉、或いは“箱根の山は天下の険”〈箱根の山〉などを作曲した偉大なる作曲家の瀧廉太郎は、僅か26歳でこの世を去った。また、東北が生んだ偉人、宮沢賢次は27歳で、石川啄木は32歳で亡くなっている。何れも太く短く生きた人達である。

これに対し、人生はとかく太く長く生きたいものであるが、なかなか容易でない。

1. 恐 竜

今から約1億年前、白亜紀になれば、全体として巨大恐竜の時代となった。彼等が他を征服するには、性質はねい猛で、体力は強いほどよい。草食、肉食を問わず、各種は競って大きく、強くなった。競って軍備拡張に憂き身をやつしたのである。それが白亜紀が終わると共に1匹残らず絶滅した。何故か？

アメリカの学者は、宇宙から沢山の惑星が飛んできて地球にあたり、無数の隕石は散乱し、それで大型恐竜は絶滅したという。その証拠も南極大陸などに無数にある。

私はこの惑星説には大きな疑問があると思う。全然軍備をしなかった恐竜こそ一番先にやられる筈であるが、それらはどうして生き残ったか。説明のしようがない。

思うに巨大恐竜は草食であろうと、肉食であろうと、生きるためには食糧が大問題である。腹が減っては戦が出来ない。そのため食糧難に陥り、互いに相食み、共食いして、遂に全滅した。

皮肉なことに、全然軍備をしなかった小型の恐竜は、ほんの僅かな食糧で満腹し、生き延びたのである。

蛇は既に白亜紀初期に現れているが、ヤマカカシを例にとって見れば、春から夏に蛙などを大いにとって食いだめ、冬になれば地下に潜って冬眠に入り、死んだふりをしている。春になれば、また眠りから覚めて活動する。

軍備をやった奴は太く短く生き、軍備をやらなかった奴は細く長く生きた。太く短くか、細く長くか、自然は常に二者択一のルールで動いている。

2. マンモス

私はかつて北満（現在の中国東北省の北部）の洪積層中からマンモスの牙を採集したことがある。全長2m余、大きく弓なりに湾曲していて、とても一人ではかかえきれぬほど重かった。

マンモスはこの大きな上顎の犬歯が武器で、これが体の全長と共に左右両方からどんどん伸びて行き、他を征服したのである。彼等の牙は伸びれば伸びるほど、それを支える頭蓋骨もそれに比例して大きくならねばならなかった。

哺乳動物はすべて、頭の大きさと胴体の大きさと割合は、ある範囲内で常にバランスがとれていなければならない。マンモスはこの原理を知らずして、どんどん頭と胴体の大きさがアンバランスになった時、1匹残らず地上から姿を消したのである。敵を倒すための武器が、返す牙で自らを倒す武器となったわけである。

3. 人間（人類）

人類は他を征服して、万物の靈長となった。その武器は何か。いうまでもなく頭である。頭の働きである。

然らば、人間は頭によって亡びることは約束済みである。敵はライオンでも虎でもない。人間同志の共食いである。もう共食いが始まっている。武器は核兵器である。日本以外の世界の

列強は皆核兵器を持っており、非常の場合に備えている。

我々は折角持っている頭を働かして、核を兵器ではなく、平和利用に役立てねばならない。すなわち、原子力発電である。

かくして人類を1年でも長生きさせることこそ、我等文明人の責務である。

（長崎県地学会名誉会員）

米寿を迎えられる野田光雄先生

長崎県地学会

長崎県地学会名誉会員の野田光雄先生は、平成7年には満88歳の米寿を迎えられます。心からお慶び申し上げ、益々のご健勝を祈り上げます。先生は、長崎県においては、主として炭田地域の層序、西彼杵半島の地質構造などのご研究をされましたが、特に「北松型地すべり」の提唱者として著名です。ここに、先生のご略歴と業績の一端をご紹介します。

略 歴

明治40年(1907)10月11日、佐賀県佐賀郡大和町に生まれる
大正14年(1925) 佐賀県立小城中学校卒業
昭和3年(1928) 満州教育専門学校卒業
昭和3～6年(1928～1931) 開原小学校、四平街小学校訓導
昭和9年(1934) 東北帝国大学理学部地質学古生物学教室卒業
昭和9～13年(1934～1938) 撫順中学校教諭
昭和10年5月(1935) 日本地質学会賞
受賞論文：北上山地西部長坂村付近の地質学的研究 地質学雑誌 第41巻, 第490号 (1934) (本邦最初のデボン紀層の発見)
昭和13～20年(1938～1945) 満州国立中央博物

館学芸官地質課長・新京工業大学教授
昭和17～19年(1942～1944) 海軍省嘱託（ニールギニア調査）
昭和19～20年(1944～1945) 陸軍応召
昭和21～22年(1945～1947) 中華民国立瀋陽博物院研究官幹事・国立東北大学教授（留用）
昭和22～24年(1947～1949) 商工技官・通産技官
昭和24～46年(1949～1971) 九州大学教授（教養部）
昭和25年(1950) 理学博士（九州大学）
昭和46年(1971) 九州大学名誉教授
昭和46年～53年(1971～1978) 福岡大学教授

主要著書

日本の風景と満州の風景 満州帝国教育会（昭和18年）
日本地方鉱産誌 九州地方（共著）朝倉書店（昭和36年）

日本地方地質誌 九州地方（共著）朝倉書店（昭和37年）
大学教養地学 共立出版（昭和48年）
ある山男の記録 富士製版出版部（昭和49年）
学術論文 約120編